

障害児の学ぶ場 難しい選択

標題は朝日新聞7月29日朝刊。通常学級入り「完全付き添い」負担という見出しも。リードから— 重い障害がある子どもの学ぶ場は2013年以降、本人や保護者が小中学校の通常の学級



が望めば、その意思が最大限尊重されるようになった。だが実際は、保護者の負担が大きく、受け入れ態勢も不十分なままだ。障害が軽い子どもも必要な支援を受けられるかどうかをめぐって、通常の学級と特別支援学級との選択に揺れる。

キーワードから—障害が一定程度重い子どもは従来、原則として特別支援学校に進むことになっていた。だが、文部科学省は13年、障害のある子と、ない子がともに学ぶ「インクルーシブ（包摂的）教育」の考え方に立って制度を改正。どこで学ぶかは本人と保護者の意見を最大限尊重して決められることになった。しかし、一定程度の重い障害があり、小中学校の通常の学級で学んでいる子は全国で約2400人とどまる。

午前8時、東京都世田谷区立中学校の特別支援学級に通う2年生、神谷幸多郎君(13)は黄色いスニーカーを履いて家を出た。歩いて5分。1人で登校するダウン症の幸多郎君を、父和志さん(51)と母有子さん(52)が見送った。小学校は通常学級で学んだ。通常の学級に入る条件は「完全付き添い」。それでも、大勢の友達の中で、社会のルールを身につけさせるために意味があると考えた。3年生のある日、幸多郎君は教室で嘔吐とお漏らしをした。付き添っていた有子さんはいたたまれず早退させた。しかし、翌日、同級生たちは「どうして昨日は帰っちゃったの」と言った。有子さんは「息子はクラスのお荷物だと思っていたけれど、同級生は一員だと思ってくれていた」。泊りがけの登山教室では風呂も寝るのも同級生が手伝い、クラス対抗の大縄跳び大会では、跳ぶタイミングを背中をたたいて教えてくれて優勝できた。和志さんと有子さんは言う。「幸多郎も同級生も一緒に学んだからお互いを理解できた。健常者の子供たちのなかで社会のルールを学べたことは将来につながると信じている」

ただ、負担は重かった。小学校入学当初、フルタイムで働いていた有子さんに代わり、和志さんが仕事の時間をずらして付き添った。昼休みと午後は祖父に交代したが、2年も続けると疲労で体調を崩した。時給千円で付き添いしてくれる人を募ったため、毎月、十数万円かかった。5年生の時、全公立小中学校に各1人、支援員が配置されるようになった。幸多郎君に付き添ってほしかったが、支援を必要とする子は複数いた。「入学時の条件は覆られなかった」と振り返る。

@「障害児の学ぶ場」についてこれからもレポートしていきたい。(2017年8月4日)